

## 国 境

伊谷 純一郎

アフリカの古い野帳を繰って、私の足跡を眺めているのだが、かなり頻繁に国境に足を運んでいることに気づく。国境を越えて隣国を訪ねるためではない。さしたる目的もない行動なのである。

35年も前のこと、ウガンダのカヨンザの森での調査を終えて、車を北に向けひたすらサヴァンナを走り、スーダン国境まで行ったことがある。テルミナリアの疎開林が延々と北に広がっているということ、ただそれを確認したにすぎなかった。

北西ケニアでのトゥルカナの調査中にも、私はしばしば国境に近づいている。トゥルカナ・ランドは乾いていて、暑い盆地の底なのだが、西方には、ティムのエスカーPMENTが連なり、その上はウガンダのプラトーになっている。ティムの下の町ロレンから南西に、国境に近い山に分け入ったことがある。この山中での、トゥルカナの敵ウガンダのジエの遊牧民との、一触即発とも言うべき出会いは、いまでも忘れ得ない。

トゥルカナ・ランド北西端の町ロキチョキオには二度訪れている。モギラ山の西麓を北に辿れば、スーダン国境は指呼の間である。当時、トゥルカナとスーダンのトボサの間では激しい略奪が繰り返されており、2年前には、平和なトゥルカナの牧野であったこの付近は無人と化していた。私たちは、危険の予感ぎりぎりのところまで車を進めてあと戻りした。

ロキチョキオからティムに沿って道なき道を南下し、オロボイに抜けたことがある。車で遡った河床には、真新しいライオンの足跡が点々と印されていたが、それよりもドドスの戦闘集団にどこで出会っても不思議のないルートだった。オロボイは、ケニアの国境守備隊が駐屯している淋しい小さな町だった。

トゥルカナ・ランドの北辺、ロティキビ平原は、東のロクワナモル、西のモギラ両山塊の間に開けるまっ平らな大草原である。その地平に、スーダンとの国境線が走るムルア・キデルの岩が蜃気楼に揺れている。私たちはこれに向かって歩き始めた。トゥルカナの牛群もまばらになった頃、突然ロッカウオが同行を拒絶し、やむなく引き返した。いまでも残念に思うのだが、無人の国境に達しても、まだその彼方の地平線を望むこと以外に得ることはなかったはずである。

トゥルカナ湖の北西端トデヤングには、古風な城塞があり、国境守備隊が駐屯していたが、その付近ではエチオピアのマリレの牛群を見た。北西に進み、何の標識もフェンスもない国境を越えてスーダン領に入り、原野の中のコクロの城塞を訪れたが、不思議なことに砦を守っていたのはケニア・ポリスだった。

ケニアとエチオピアの国境の町モヤレにも行った。国境を挟んで、ケニア側の町はモヤレ、エチオピア側はモイヤレだと聞いたが、エチオピアの内戦時で、数日前にモイヤレに襲来事件があり、何人もが殺されたということだった。

国境とは人間が勝手に引いた線にすぎない。欧州列強によるアフリカ分割の爪跡は、いまでも東アフリカ、サハラ、南部アフリカに直線で仕切った国境線として歴然と残っている。そのことは承知の上なのだが、国境には一種独特のノスタルジアと緊張が漂っており、それが私の心を誘ったのだろう。

スーダンとエチオピアは、私にとっては、ついに国境の彼方の国になってしまったようだ。

(いたに じゅんいちろう 神戸学院大学)